

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 138 回 目指せ「オルフェウス」～中小企業の「夢」

2006.2.26

先日 NHKBS 放送で素晴らしい番組を見た。

タイトルは「指揮者のいないオーケストラ～オルフェウス室内管弦楽団に学ぶ企業経営者たち～」で、確かそんな番組名だったと記憶している。彼らのライブ演奏会と共に、早速 DVD に録画して、何回も楽しんで見ている。

このチェンバーオーケストラ（室内管弦楽団）文字通り指揮者をおかない。指揮者のいない演奏スタイルは、この例以外幾つも見ることができるが、その多くの場合、指揮者の機能をコンサートマスター（第一ヴァイオリンのトップの人が多い）がやっている。しかし、「オルフェウス」のやり方はちょっと違うようである。

メンバーは 30 人前後の小楽団で、人種、国籍はマチマチである。白人、黒人、東洋人、もちろん日本人もいる。常に「リーダー」と称する人を中心に曲づくりをしており、しかもリーダーは、極端に言えば演奏曲目ごとに違う。

曲づくりの最中は、遠慮なく全員が意見を出し合い、メンバーの上下関係は存在しない。役割分担が違う中で、目指すべきベクトルを、全員総意の元で築き上げ、ケンケンガクガクのなかで目標を決めていく。つまり、指揮者の独断的個性主義の音楽でなく、スタッフ全員で作りに上げた共有する音楽、こんなこと今までこの世界に存在しなかった。

そうした過程の中で、目標が決まった以上、全員その方針に則^{のっと}って、全力でその達成に向け邁進する。

毎회가、そんなスリリングな演奏を展開しているのである。

楽曲作りでは、指揮者が絶対君主として存在するこの世界において、全くユニークなオーケストラである。そんなことから最近、クラシック音楽界のみならず、新しい組織のあり方として企業経営者達からも注目されている。

一見面白^{おもしろ}そうで、いかにも今風で、すぐにでも我社も参考に、そのシステムを導入してみよう...そう願いたいところであるが、それを成功させるためには、大きな前提があること忘れてはならない。

まず彼らは「演奏家」というプロフェッショナルな集団であるということ。個々人の音楽に対する技量（スキル）があつての話である。

さらに重要なことは、目指すべき目標が同じで、全員がそれを熟知していることである。しかもその目標は、与えられたものでなく、自分達自ら作り上げたものであること、なかなか容易^{たやす}くできるものではない。

どういふことかといえ、指揮者のいる通常のオケメン（管弦楽団の団員）は、担当する自分のパート譜を一生懸命読み、練習し、指揮者の指示に従えば、それなりの役割は果たせる。

しかし、オルフェウスのメンバーは、全員がスコア（総譜）全てを読みこなしている。つまり、自分仕事だけでなく、他の人の役割、なすべき仕事の内容まで全て理解した上で、みんなが目指すべき方向性を模索しながら意見を言っているのである。

そして最終的な目標は、来てくれたお客様に喜んで頂く、つまり、最大多数の顧客満足を提供することに他ならない。

組織的にも硬直化された日本企業は、新たな原動力を生み出す新方策を模索し、長い間悩み続けている。やれ「コーチング」、「マインドマップ」そして「成果主義」と、試行錯誤を繰り返すが、欧米流の超現実的プログラムは、なかなか日本の企業社会に馴染^{なじ}まない。にもかかわらず、時代はかまわず急変する。硬直化からの脱皮を成しえることができないまま、増収増益を唱えること自体、「馬の耳に念仏」、正に滑稽な事と映ってしまう。

オルフェウス室内管弦楽団と同じ 30 人前後規模の中小企業、小社も含め、我々の周りには多数存在する。こんな「オルフェウス・システム」の構築ができること、それこそ究極的「夢」かもしれないと思いつつ、羨望^{せんぼう}の眼^{まなこ}で今日もDVDを聞いている。

でもいつか、この「夢」の実現に向かい、思い腰を上げなければならない。日本人大好きな「総論賛成、各論反対」、カッコいい理論展開は得意だが、何ら具体的行動を伴わない、「頭でっかち」風潮...こんな発想をぶち破る行動が、今、どんな高邁な理論より重要な事である。

「いい話を聴いた」、「いい音楽を聴いた」で終わらせてはならない！何からはじめたらいいか、すぐ、動いてみようではないか！！